原 著

我教室ニ於ケル既往十ケ年間ノ
耳性頭蓋内合併症ノ統計

F. Tanaka: Casuistische Untersuchung über die otogenen

intrakraniellen Komplikationen in meiner Klinik.

(和辻先生古稀記念論文)

岡山醫科大學教授

醫學博士 田 中 文 男

耳性頭蓋内合併症ノ診斷並ビニ療法ハ近來著シク進歩シ、其成績ニ見ルベキモノアリテ、單ニ耳科學上ノミナラズ、一般醫學的ニモ亦大イニ興味ト注意ヲ喚起シツ、アリ。而シテ之等ノ進歩發達ノ跡ヲ批判シ、一定ノ見解ヲ得ント欲セバ、之ヲ信據スベキ統計的研究ニ待タザルベカラズ。之ニ就テハ從來多ク企テラレタルガ如ク、誌上ニ報告セラレタル個々ノ症例ヲ蒐集シ、之ヨリシテ其歸スル處ヲ知ラントスルガ如キハ、誠ニ無謀ニシテ且ツ無意義ナリ。何トナレバ之等ノ各症例ハソノ報告者ノ便利或ハ利益上ヨリシテ記載サル、事多ク、從ツテ之ヨリ得タル統計的見解ハ事實ヲ遠ザカル事甚大ナルモノアレバナリ。サレバ之ニ就テハ主トシテ一臨牀ニ於ケル連續的觀察ヲ必要トス。此缺陷ヲ補ハンガ爲ニ、余ハ我教室ニ於ケル大正十一年一月ヨリ昭和六年十二月ニ至ル滿十ケ年間ノ耳性頭蓋内合併症ヲ調査シ、之ヲ統計的ニ觀察セリ。其症例未ダ多シト言フヲ得ザルモ、之等ニ對スル經驗ノ跡ヲ尋ネ、得ル處少カラザルモノアルヲ信ズルガ故ニ、此處ニ其大要ヲ報告セントス。

即チコノ滿十ケ年間ニ於ケル我教室ノ耳性頭蓋内合併症ハ、之ヲ硬腦膜炎乃至硬腦膜外膿瘍ヲ除去スレバ、其全數六十三例ナリ。今之ヲ細

原 著

田中||我教室ニ於ケル既往十ケ年間ノ耳性頭蓋内合併症ノ統計

第三十八卷

五九五

(第六號

一)

別スレバ次ノ如シ。

自大正十一年一月十ケ年間ノ耳性頭蓋内合併症
至昭和六年十二月
症例總數 六十三例

(1) 腦靜脈竇血栓	二十五例
(2) 化膿性軟腦膜炎	二十六例
(3) 腦膿瘍	二例
(4) 竇血栓及ビ化膿性軟腦膜炎	五例
(5) 化膿性軟腦膜炎及ビ腦膿瘍	三例
(6) 竇血栓及ビ腦膿瘍	二例

但シ同一人ニシテ二ツ以上ノ合併症ヲ有スルモノアルガ故ニ、之ヲソノ病症ノミニヨリテ計算スレバ、竇血栓三十二、化膿性軟腦膜炎三十四、腦膿瘍七トナル。之ヨリ考フレバ、之等合併症中化膿性軟腦膜炎ガ最多數ノ如キモ、コノ腦膜炎ノ各症例ニ就イテソノ病歴ヲ調査スルニ、是等三十四例中ノ五例ハ初メ竇血栓ノ成立ヲ見、後ニソノ進行ニツレテ腦膜炎ヲ發生セルモノ一シテ、初メヨリ腦膜炎トシテ發來セルモノニアラザレバ、之ヲ竇血栓症例中ニ殘シ腦膜炎ヨリ除外スレバ、純化膿性腦膜炎ノ症例ハ二十五トナル。此結果ヨリ見ルモ、之等三合併症中最モ多ク發現スルモノハ竇血栓ナリ。此事實ハ又實ニ信賴シ得ル泰西諸家ノ統計ト同様ナリ。然ルニ從來一般ニ中耳炎ノ危險ナル合併症トシテハ化膿性腦膜炎ガ熟知サレ、竇血栓ニ就テハ大ナル注意ヲ拂ハレザリシハ、恐ラク診療的智識ノ不充分ナリシガ爲ニ竇血栓ノ早期診斷ヲ誤リ、診斷不明ノ中ニ、或ハ單ニ膿毒症又ハ敗血症ナル診斷ノモトニ空シク時日ヲ經過シ、之ガ進行シテ腦膜炎症狀ヲ現スニ至リテ初メテ單ニ化膿性腦膜炎トシテ診斷サル、事ガ多カリシ爲ナラン。

次ニ之等ノ三合併症ガ中耳炎及ビ乳嘴突起炎ニ對スル頻度ヲ調査スルニ、過去十ケ年間ノ我教室ニ於ケル中耳炎(加答兒ヲ除ク)總數四千三十三ニシテ、頭蓋内合併症六十三例ハ其ノ一・六%ニ相當シ、次ニ乳嘴突起炎九百六十七例ニ對シテハ六・五%ニ當レリ。

然ルニ昭和六年度中ニ於ケル中耳炎ハ日本各地ニ於テ、一般ニ腦合併症ヲ起シ易キ傾向アリト認メラレ、吾人又ソノ感ヲ抱キタルガ故ニ、之ヲ調査セシニ次ノ如シ。

昭和六年度中ノ耳性頭蓋内合併症

症例總數

十五例

(1) 竇血栓	五例
(2) 化膿性軟腦膜炎	六例
(3) 竇血栓及ビ化膿性軟腦膜炎	三例
(4) 竇血栓及ビ腦膿瘍	一例

而シテ之ヲ又ソノ病症ノミニヨリテ數フレバ、竇血栓九例、化膿性腦膜炎九例、腦膿瘍一例トナル。然ルニ此場合ニ於テモ化膿性腦膜炎九例中ノ三例ハ、竇血栓ノ進行ニツレテ合併セルモノナルガ故ニ、之ヲ腦膜炎數ヨリ除外スレバ、純化膿性腦膜炎ハ六例トナリ、此統計ニ於テモ之等ノ三耳性頭蓋内合併症ニ於テハ竇血栓ノ最モ多數ナルヲ示ス。

即チ昨年中ノ之等合併症ハ總數十五例ニシテ過去十ヶ年間ノ平均ニ比シ頗ル多ク、更ニ之ガ中耳炎（加答兒ヲ除ク）並ビニ乳嘴突起炎ニ對スル比率ヲ見ルニ、前者四百八十例ニ對シ三・一％ニ相當シ、後者百三十六例ニ對シ十一％ヲ示シ、過去十ヶ年間ノ平均比率ノ約二倍ニ相當セル事ハ頗ル興味アル事實ナリ。蓋シ恐ラク此結果ハ流行セル中耳炎ガ腦合併症ヲ惹起シ易キ傾向アリシノミナラズ、他ニ又吾人ノ診斷的智識ニ加ヘタルモノアリシ爲ナランカ。

而シテ之等合併症ノ各々ニ就テノ詳細ナル統計的研究ハ別ニ報告スル處アランモ、唯ダ此處ニ之等ノ豫後並ビニ治療率ニツイテ一言セン。元來腦靜脈竇血栓ノ豫後ハ從來殆ンド絶望視サレタルモノナルガ、ツフウファルガ其療法トシテノ内頸靜脈結紮ヲ創案シ、之ヨリシテ又竇血栓ノ根本的治療ニ對シ大ナル指示ヲ與ヘシヨリ以來、之ニ一道ノ光明ヲ認メ、現今ニ於テハ其多數ヲ救ヒ得ルニ至リシハ又將ニ近世耳科手術ノ誇トスル處ナリ。之ヲ我が三十二例ニ見ルニ、目下治療中ノ一例ヲ除キタル三十一例ニ於テ、全治セルモノ二十例（六四・五％）、死亡十一例ナリ。但シ尙ホ此死亡セル十一例中ノ三例ハ種々ノ事情ニヨリ所期ノ治療ヲ施シ得ザリシモノニ屬ス。尙ホ之等ノ治療ニ當ツテ内頸靜脈結紮ノ可否ニツイテハ、從來人ニヨリ種々ノ意見アリ、之ヲ余ノ例ニ見ルニ之等三十一例中、結紮セザリシモノ十九例中、全治十二例（六三・二％）、死亡七例。

結紮セシモノ十二例中、全治八例（六七％）、死亡四例ニシテ、單ニ之ヨリノミ考フレバ、結紮セシモノニ於テ治療率少シク勝レルガ如キモ、精細ニソノ各病歴ヲ檢スルニ、其總テニ於テ必ズシモ然ラザルヲ推知シ得ルモノニシテ、之ニ就テハ一定ノ適應症ヲ標準トシテ之ヲ決定スルノ當ヲ得タルモノナルヲ信ズルモノナリ。但シ本問題ニ就テハ別ニ報告スル處アラントス。

次ニ化膿性・腦膜炎ノ豫後ニ就テハ、ベルグマンノ『腦疾患ノ外科的療法』中ニ『中耳化膿後ニ來レル化膿性腦膜炎ハ手術ニ適應セズ、須ク其儘ニシテ手下サマルヲ可トス』ト記載サレタルガ如ク、近年ニ至ル迄殆ンド絶望視サレタルモノナリ。然ルニコノ診斷及ビ殊ニソノ療法ニ就テハ又過去十ケ年間ニ長足ノ進歩ヲ遂ゲ、今尙ホソノ階梯ニアルモノナルモ、略々其歸スル處ヲ知り得タルモノ、如シ。

從來本症診斷ノ跡ヲ回顧スルニ、總テソノ病狀進行シ定型的ノ症狀ヲ現ハシ、加フルニ腰椎穿刺ニヨル腦脊髄液ノ濁濁ヲ見、始メテ之ヲ確信スルヲ常規トセルモノナルモ、今日我々ハ之ヲ早期ニ然モ諸症未ダ備ハザルニ之ヲ診斷シ得ルノミナラズ、吾人亦此早期診斷ニ對シ努力セザルベカラズ。蓋シ之即チソノ治療的效果ニ大ナル影響ヲ有スルモノナレバナリ。而シテ本症ノ療法トシテ最も有效ナリト考ヘラル、モノハ原病タル耳疾患ニ對シ之ヲ徹底的ニ治療スル外ニ、主トシテ腦脊髄液ノ排泄ヲ計ル法ニシテ、之ニヨリテ從來全ク見捨テラレタル耳性化膿性腦膜炎患者ノ豫後ニ大ナル光明ヲ認メ得ルニ至リタルモノナリ。

而シテ我教室ニ於ケル過去十ケ年間ノ耳性化膿性腦膜炎三十四例中主トシテ此腦脊髄液排泄療法ヲ行ヒシモノハ、大正十五年以來ノ二十二例ニシテ、此中九例(四一%)全治シ、十三例死亡セリ。此成績ハ本症ニ於テハ尙ホ其死亡率頗ル多キヲ示スモノナルモ、之ヲ從來ノ成績ニ比スルニ誠ニ霄壤ノ差アルヲ覺ユ。尙ホ全治セル九例ノ年齢ヲ調査スルニ、最も多キハ二十歳迄ノ四例ナルモ、之ニ反シ死亡セル十三例中最モ多キハ五十歳以上ノ六例ニシテ、本療法ノ效果モ年齢ニヨリテ影響サル、處少カラザルヲ知ル。

第三ノ腦膿瘍七例ハ之ヲ細別スレバ、顳顬葉膿瘍五例、小腦膿瘍二例ニシテ、之等ノ中手術ニヨリテ全治セルモノ三例(四二・八%)、死亡セルモノ四例ナリ。

以上我教室ニ於ケル過去十ケ年間ノ耳性頭蓋内合併症ノ統計ノ概略ヲ終レリ。而シテ之等ノ各症ノ各例ニ就テ尙之ヲ精細ニ觀察スルニ頗ル有益ニシテ興味アル事實少カラズ。之等ノ詳細ニ就テハ更ニ又稿ヲ改メテ報告スル處アラントス。

KURZE AUSZUEGE

Casuistische Untersuchung über die otogenen intrakraniellen Komplikationen in meiner Klinik.

Von

Prof. Dr. **F. Tanaka.** (Okayama.)

Diese Mitteilung beschäftigt sich mit casuistischen Untersuchungen über die otogenen intrakraniellen Komplikationen, d. h. mit 32 Fällen von Sinusthrombose, 29 Fällen eiteriger Leptomeningitis und 7 Fällen von Hirnabscess, welche Verf. in den letzten 10 Jahren in seiner Klinik behandelt hat.

(Autoreferat.)

Casuistische Untersuchung über die otogene Sinusthrombose in unserer Klinik.

Von

Prof. Dr. **F. Tanaka**, Assist. Dr. **Kuwahara** u. **Nishimura.** (Okayama.)

Verfasser haben 32 Fälle otogener Sinusthrombose, die sie in 10 Jahren in ihrer Klinik behandelt haben, casuistisch untersucht. Was den Ausgang dieser Fälle betrifft, so ist in 20 von diesen Fällen (64,5%) durch die Operation eine Heilung erzielt worden.

Sie sind der Meinung, dass die Vena jugularis interna nur im Falle einer bestimmten Indication unterbunden werden muss.

Für die Diagnose betrachten sie den Queckenstedt'schen Versuch als ein beweisendes Hilfsmittel.

(Autoreferat.)